松任谷正隆の 僕のひとりごと 31

VOL.31　ある一夜

お菓子の家みたいだった松原の家。家賃23万を高いとみるか、安いとみるか・・・。
当時の僕にはべらぼうに高いと思えた。借りるだけにそんなにお金を払うくらいだったら
無理しても家を建てた方がいい、と考え始めた。
それにその家は大家さんが帰ってくるまでの2年くらいの契約だったんじゃなかったか。
でも家を建てることを想像すると気が遠くなった。30手前の若造がそんなことをしてもいいのか。
いやいや、それ以外の選択はなかった。そのままにしておけば、きっと2年後にはもっと高い家賃を払って、
住みたくもないようなところに住むことになるのだ。それを考えるといつも憂鬱になった。
我々の生活はと言えば、僕は編曲の仕事でほぼ毎日遅くまで仕事をし、
かみさんのほうは雑誌やらその他でそれなりに忙しくしていた。

社交が仕事、というのがこの頃の彼女の口癖だった。なんだそれ？とも思ったが、結婚2年目とか3年目なんて
そんなものかもしれない、つまり、知らないことが山のようにある、ということが分かっていく時期なんだ、
と思い聞かせて過ごしていた。今思えば、彼女にとっては精神的に一番苦しい時期だったのかもしれない。
というよりそうだったはずだ。そして僕には引っ張っていくような力はなかった。
ようやく彼女がコンサートをやりたい、と言いだし、
葉山マリーナでのコンサートが決まった。



コンサートは彼女の演出と言ってもいいものだった。
もっとも、プールの前でやりたい、
そのプールをゴムボートで一周回りたい、
そしてオウムを肩にとまらせたい。
というのがそのアイディアの全てだ。

そうそう、当時有名なラジオDJの糸井五郎さんに司会をやってもらいたい、
というのも彼女のアイディアだったっけ。
オープニングではバンドメンバーが彼の紹介で
ステージに上がるのだけれど、ドラムから始まり、
最後の僕の紹介で「松任谷よしたか！」と紹介され、
一瞬、出て行くのをやめようかと思ったことを思い出す。
コンサートの中身のことはあまり覚えていないけれど、
すごくうまくいった、とは思わなかったはずだ。
でも失望した、というほどでもなかった。
要はよく分かっていなかったんだと思う。



終演後に知り合いのカメラマンが友人を連れて僕に会いに来た。
その友人が何か言いたそうだったので、感想を聞いた気がする。
さらにその感想には長い続きがありそうだったので、そのままうちに来ないか、と誘った。
かみさんは久しぶりのコンサートのためか疲れているようで、あまり乗り気ではなかったが、僕があまりにも是非、
と誘っているのを見て諦めたようだった。それにコンサートの話だから、自分に関係のない話ではないわけである。
お菓子の家に着いたのが夜の 10 時過ぎだったろうか。クッションしか置いてない、ビニールタイル張りの８畳くらいの
リビングであぐらをかきながら、なんだか夢中になって彼と話をした。コンサートの感想から始まり、
彼の生まれ故郷の話、子供の頃に見た大道芸の話・・・。彼は当時、作詞とかもしており、
あながち音楽と無縁ではなかった。本来は作家志望で、文章も書いていると言っていた。
今思えば、彼は人たらしだった。僕はすっかりその話しぶりに引き込まれた、というより飲まれていたんだと思う。
気がつくと、彼にかみさんの演出をやってみないか、と言っていた。
どの口がそんなことを言うんだ、と自分でもあきれたが、人たらしとはそういうもの。
演出などやったことのないという彼は、やるとも言わず、やらないとも言わず、ただニヤニヤするばかり。
彼が帰っていったのは夜が明けてからだが、その間の時間の経ち方、部屋の風景などはなぜか鮮明に覚えている。
結果、人生を変える一夜だったからだと思う。
伊集院静氏。まだ本格的に作家デビューする前の話である。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14 歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド “キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ” を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy